

啖猿市

司馬遼太郎

講談社



しりくら まごいち
尻 喰 え 孫 市

著者の了
解により
検印省略

昭和39年12月10日 第1刷発行

著 者 し ば りよう た ろう
司 馬 遼 太 郎

¥ 390 発 行 者 野 間 省 一

印 刷 所 慶昌堂印刷株式会社
(加藤製本)

発行所 東 京 都 文 京 区 株 式 講 談 社
音 羽 町 3 一 19
電話東京 942-1111(大代表)

© RYOTARO SHIBA 1964. PRINTED IN JAPAN

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

目

次

閨	鐵	砲		五
京	へ		八	
姫御料人		允		
すばる星		壹		
雜賀	へ		一〇二	
雜賀城		一〇六		
和歌浦騒動		一〇四		
法專坊		一一〇		
鷹ノ巢岬		一一七		
片男波		一二三		
堺	へ		一二〇	

鉄砲鍛冶	一四
鉄砲仙斎	一五
その当時	一五
鉄砲守護神	一五
古祠の森	一七
信太の里	一六
愛山護法	一八
阿弥陀如来	一八
入城	一八
合戦	二〇
天満の本陣	二八

滓上江の合戦	二三四
信長敗走	三〇
京の雨	三六
墨染の鉄砲譚	三三
族長たち	一三七
ぼるとがる様	一四三
信長狙撃	一四九
織田軍退却	一五五
雑賀海賊	一六〇
百雷	一六六
形勢	一七三

大	寄	せ	三九
鉄	砲	合	二五
渡	河	戦	二九
露		草	二六
踊		り	三〇
頼	み	参らせ候	三〇
風	吹	峠	三七

装幀 吉田 幸子
 題字 山崎 百々雄

尻し
啖く
え
孫
市

赤羽織

一

元龜元年二月。

城下にえたいの知れぬ男が入ってきた、といううわさは、その日のうちにひろまった。

いやもう、傍若無人。

ちょうど城外の長良川畔で諸国の博勞があつまる馬市が立っていたが、

「この馬はなんぼじゃ」

と、その怪漢が野太くきいた。

——金二枚よ。

と博勞がいうと、「安いいう。あとで旅館へ曳いてこい。余分は酒でもくらえ」

と、むぞうさに金をつかみ出し、なんと金で五枚、ちらりと投げ捨てた。

(狂人か)

と、みな思ったのもむりはない。風体は、真赤な袖無羽織、真白になめした革ばかま。腰には、古びた黄金づくり

の大小を帯びている。

それに二尺ほどの大鉄扇を持ち、従者がふたり。——その従者の一人は、旗をかついで背後でかしまっていた。旗には、

日本一なんのなに某

墨はだいぶ、風雨にさらされてかんじんの名前は読めないが、とにかく「日本一」らしい。ただし、なんの日本一かはわからない。

くるり。

うしろをむいて、町の雑踏のほうへ男は足をむけた。

背中で、烏がとびたっている。むろん黒く染めぬいた絵で、この男の定紋らしいが、その烏は、足が三本。

「熊野烏だな」

と、物識りは知っていた。熊野の神鳥で、伝説の八咫鳥である。神武天皇を大和へ先導したというあの神話の鳥のことだ。むろん実際は人間で、いや神様で、賀茂建津命といい、神社は天下に三ヵ所ある。しかし、この烏を定紋にしている男というのも、めずらしからう。

とにかく、巨漢である。

それが、ゆっくりと城下を歩く。

眼はぎろっとしているが、口もとに愛嬌があつて、顔のなかを涼風が吹きとおっているようなすがすがしい感じの男だ。

「まったく、めずらしい町だな」

男は、この新興都市のにぎやかさには、すっかり気に入ったらしい。大げさにいえば異国にまぎれこんだような、風変りな町である。

男は、町をあるく。

事件はこのあとでおこるのだが、その前にかれが歩いているこの異風な都会を説明しておかねばなるまい。

名を、岐阜ぎふという。

——いやまったく。

と、かれよりも三、四年前にこの町にきたポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、その書簡のなかで驚嘆している。

われわれは岐阜城の町について。人口約一万である。和田どの（惟政・高山右近の実兄）が指定した旅館に入ったが、その騒々しいこと、バビロンの混雑に似ている。各国の商人隊が、塩、布、その他の物産を馬に積んでこの町に集まり家々は雑踏してなにもきこえず、あるいは賭博し、あるいは食し、あるいは売買し、あるいは荷造りし、あるいは荷を解く者、昼夜絶えることがない。旅館はどうも静かでない。だからわれわれはみな二階にいた。私の紹介状の宛てぬしである高官（木下藤吉郎秀吉）はちょうど尾張に出張中で、柴田（勝家）どのも佐久間（信盛）どのもまだ京都から帰っておらず、そのため、王の前に出ることができなかった。たまたま右の二人が京都から帰ってきたので、まず、王の軍隊の総隊長である

佐久間どのを訪問した。（中略）

私は、王の宮殿をみた。私が建築家ならもっとすばらしい描写をすることができるのだが、とにかく、わが故国ポルトガルから印度そして日本にいたるまで、私が今までみた宮殿のなかでこれほど精巧美麗清浄な建築はない。（後略）

王とは、織田信長のことである。かれは岐阜王であってしかも諸方に軍隊を出し、天下をねらう野望に燃えていた。この日。

というのは、真赤な袖無羽織の壮漢が城下に入ってきた日、たまたま在館して、京からまねいた幸若舞を見物していた。諸芸諸事、極端にものずきな男だが、この幸若舞がとくにすきで、自分でもへたな女人ぐらいには演れる。

城は背後の稲葉山上にあり、信長の居館はその山麓にある。フロイスがおどろいたのはこの居館の豪奢さで、「内部の諸室はまるでクレタの迷宮である。四層の建物で、一階は十五から二十のザシキと称する美麗な室があり、黄金の屏風には、純金の釘、縮金がつかわれている。二階は王妃と侍女の休憩室、三階は茶を喫する部屋、四階は望楼。ここから城下の高官の屋敷、町家がひと目でみえる」といっている。

舞がおわってから、王、いや信長は、三階の茶室にひきとって、御伽衆から、城下のうわさ、諸国の見聞などをきいた。

御伽衆とは、当時の戦国武将のそばにつかえ、耳学問をさせる役目である。敗亡した名家のなれのはての老人もおれば、歴戦の老武者、禅坊主、学者、絵師など前歴はさまざまなものだ。

きょうの番は、城下に町住まいする範のうという絵師で、信長はこの男の癖で、いつも胃の重そうな顔をして聴いている。

合槌も、うってやらない。

ときどき、幼少のころからの口癖で、

「デアルカ」

と、つぶやく。あとは眼を閉じている。

が、この瞬間だけは、異例だった。

「なに、熊野鳥の紋所の男？」

らんと眼をひからせた。せきこんで、

「その男、名は雑賀と申さなんだか。雑賀孫市」といった。

「さあ、名乗りのほどは。――」

「話をつづけろ」

二

その赤羽織の熊野鳥。――

町の雑踏をのしあるいていた。従者が例の旗を捧げもち、もう一人の従者が、青貝をすりこんだ三間半の槍をもっている。

妙なことに、この奇矯な男にどういふ威厳があるのか、

男が大路の中央をあるくと、さしも喧騒な町が、すーっ、としずまる。みな声をのむのである。

もし例のフロイスがこの光景をみれば、この旅の武士こそ、岐阜王ではないかとおもったことだろう。

が、不幸がおこった。

男のむこうから、槍組の足輕一隊をつれた騎乗の武士が進んできたのである。

この城下の習慣で、町民はいっせいに軒端に身を寄せて、織田家の隊伍を通すことになっている。

しかし、赤羽織は進んでゆく。

「退けっ」

と、馬上の足輕大將は叫んだ。同時に、配下の足輕数人が、槍をさかさまに構えて、赤羽織を棒突きに突こうとした。

「なんじやい」

赤羽織は、白い歯で破顔した。しみとおるように入懐っこい笑顔だった。

「この道は通れんのかい。織田殿の新城下といえ、^{楽市}楽座、^{楽座}天下のあきゆうど、^{楽座}天下の武士、^{楽座}牢人、^{楽座}雑人、^{楽座}河原者にいたるまで自由自在に出入りせよ、という評判をきいてわざわざ遠い郷国からやってきたが、聞くとは相違、道も通れんのか」

どうやら怖いもの知らずらしい。

「だいぶ異風いて（不良化して）おるやつらしい。打擲して、織田ぶりをみせてやれ」

と、馬上の足軽大將が、鷹揚に命じた。

「おうさ、かしこまった」

どっと、足軽は声をあげた。このころの足軽ときたら、殺伐を絵にかいたような曲者ぞろいで、人を殺してなますにするなどは、屁ともおもっていない。

わっ、と飛びかかった。

ところがどういふものか、赤羽織は、その棒突きの槍ぶすまの中で、ひらひらと手ぶりおかしく舞いはじめた。

舞うと同時に、足軽が、三人、四人と、小石のようにはねあげられては、地に落ちる。

——そのとき、黒旋風がおこったそうにおじやります。見ていた町の者は、あれは天狗じゃ、鞍馬の太郎坊でも人に化けて蹶じたのであらう、と齒の根もあわず、蒼うなつて申しましてござりまする。

と、御伽衆の絵師はいう。

「ふむ。——」

信長は、それには興味がないらしい。

現場では、——むろん黒旋風などはおこらないが、赤羽織はするすると槍ぶすまの隙間を縫い、縫っては投げ、投げては身かわしてさんさんにからかったあげく、騎馬武者の馬の前脚二本を抱きすくめ、

「えいっ」

ともいわず、馬をあおむけざまにひっくりかえしてしまつた、という。

「馬鹿力な男もあるものよ」

と、これも信長の興味をひかない。

「つづけろ」

「へっ。——それで」

「それでどうした」

「ゆうゆう、赤羽織は、宿舎にひきあげたげにござりまする」

「伊賀守をよべ」

へへっ、と近習が、すばやく膝をしりぞかせつつ、座を立った。

入れかわつて、町奉行の和田伊賀守が平伏した。

「聞いたか」

例の一件を、である。が、信長は、述語だけをいう癖があつて、主語は、家臣が想像するほかない。自然、鋭敏なカンを要するのだが、これは、木下藤吉郎が特技とした。この男の異数な出世は、ひとつは、信長の言外の言葉を機敏にききわけたからだらう。

「聞きおよんでおりまする」

伊賀守は、あてずっぽうでいった。

「あの赤羽織、そつとしておけ。かまえて、手を出すな」

「へへっ」

やつと、例の一件がわかつた。

「猿はおるか」

と、ふりかえつて、また近習へ。

「はっ、屋敷に在せられまする」

「呼べ」

と命じ、あとは、手首をふった。消えろ、という意味である。

町奉行も御伽衆も、あわてて膝を擦り、信長の視野からのがれた。絵師や町奉行が察するところ、どうやら、信長は、赤羽織に強烈な関心をもったらしい。いやそれも、赤羽織の神仙じみた怪力よりも、その紋所に関係をもったようであった。

——猿を呼べ。

は、尋常の関心ではなかった。猿でなければつとまらぬ密用があるらしい。

(何者であるうな)

絵師の範のうにはわからない。

町奉行の和田伊賀守は、あるいは遠国おんごくの大名が、忍んで岐阜の城下にきたのではないかとみた。

(大名。……しかも熊野烏の紋所の。はて、左様な紋所の大名がいたかな)

乱世である。今日の地図はあすの用に立たぬほどに、諸国の治乱興亡ははげしい。東国きょうこくか西国さいこくか、あるいは、佐渡、宍粟などの海のむこうには、そんな出来星大名が、ひょっこり出来ているのかもしれない。

(あの赤羽織がの)

信じられないことだが。

三

一方、赤羽織。

どうも、ひどく好色な男らしい。いや好色ではなく、劇はげ気きているのであろう。

夕方、またこの男は町に出た。町がめずらしくてたまらぬ様子である。

「見えるぞ、見えるぞ」

といひながら歩いてゆく。

まるで、気狂いである。

見える、というのは、辻君つぎみのことだ。夕暮になると、辻君が、その名のとおり、辻々にしゃがんでいる。

ムシロを敷き、立て膝をしているのだ。白い脛がみえる。わざと見せている。その奥までが、ほのかにみえるような様子ぶりで、客を手でまねいている。

「見えるぞ、見えるぞ」

と、赤羽織は、一人一人のひざをのぞきながら、無邪気な笑い声を残してゆく。それがまったく、この世に生きているのが楽しくてたまらぬという無垢無邪気な様子だから、どの辻君も、この男が通りかかると、われにもなく一種の陶醉感をもった。思わず惹きこまれるような気がする。

(これが、男の中の男か)

と知らず知らず口をあけて見送るような残香のこりかを、赤羽織はもっている。しかもいつのまに置くのか、どの遊女の前にも、永楽銭十枚をつんだひねり紙を置いてゆく。見えた駄賃だちんなのか、それとも、神仙に賽銭さいせんでもおくつもりなのか。

翌日も、おなじである。

その翌々日も、

「見えたぞ、見えたぞ」

と、楽しげにのぞいては、すぎてゆく。ちゃんと賽銭が
おいてある。

三日目には、町中の人気者になった。

しかも、乗りこんできた初日に、城士に対してあれだけの
乱暴狼藉を働いたくせに、御城からはなんの苦情もない。
例の足輕大將も、仕返しに来ようともしない。御城
は、見て見ぬふりをしていうようであつた。この男は、ど
れだけの特権があるのか。

四日目には、町を歩くと、賭博をしている群れも、市に
むらがつている他国者も、みなこの男がやってくると丁重
に頭をさげるようになった。いうなればこの町に、信長の
ほかにもうひとりの「王」ができたようなものである。

事実、四日目の夕暮、この男が、町はずれに立つて、長
い影をひきながら、ぼう然と稲葉山頂の白い城廓をなが
め、

「あの城を欲しやのう……」

と聞きすてならぬことをつぶやいているのを、耳にした
者もある。

男は、城下第一の旅宿「分銅屋」という家に従者とともに
とまっている。

奥の間一室と、階下一室を借りきり、陽が落ちると町か
ら帰ってきて、灯明一穗をひきよせ、夜がふけるまで独り

で酒をのむ。

独りのときは、眼を伏せている。別人のように物憂い表
情である。いちど、亭主の分銅屋三郎五郎が障子のすきま
からかいまみて、あつと声をたてそうになったほど、さび
しげな表情であつた。

じつのところ、三日目の夜、織田家第一の出頭人木下藤
吉郎が、家来もつれずに微行でやってきて、亭主に、

「あの客人、粗略にするな。ただし、よく見張るように。
あの者が何を云ったか、どういうことをしたか、毎日、わ
が屋敷へきて、つぶさに話してくれい」

と、砂金一袋を置いて行つた。

むろん木下藤吉郎は、この赤羽織、熊野烏紋の旅の武士
が、紀州雑賀（いまの和歌山市）の雑賀党という地侍集團の
頭目、雑賀孫市であることは知っている。知っているが、
亭主には、なにもいわなかった。

（なんの目的できたのか）

藤吉郎秀吉の知りたところである。

秀吉も、「雑賀党」というふしぎな集團のおそろしさは、
戦国人の常識だけに、十分に知っているつもりである。

諸国の大小の合戦のばあい、雑賀党がそのどちらかに味
方すれば、味方したほうが苦もなく勝つ、というのが、常
識であつた。

しかも、雑賀党というのは、いかなる大名にも属してい
ない。頼まれて相手が入れば、出陣するだけのこと